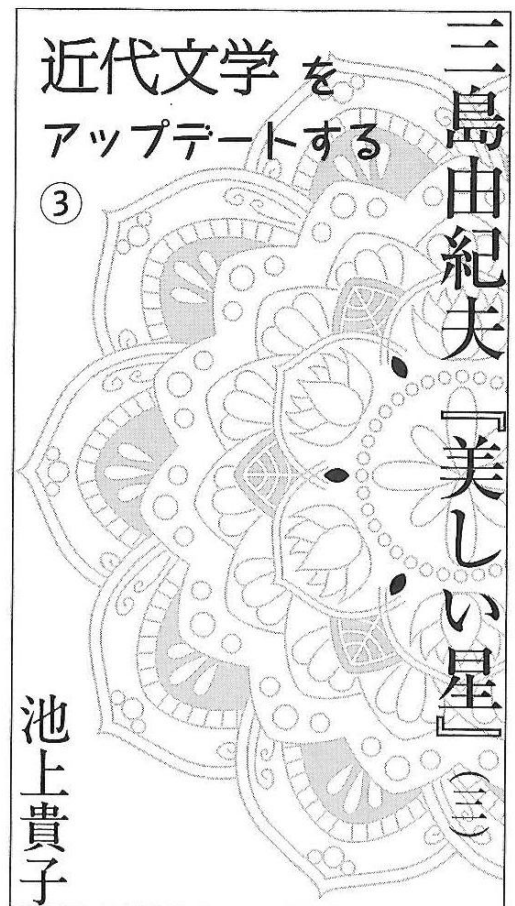




一、宇宙人を見る「夢」は？

この連載の第一回で、三島が『美しい星』の視点人物を「宇宙人」に設定した理由について、「宇宙人の一員としての地球人」という三島の高次の自意識が関係することを述べた。米ソの科学技術競争の激化により双方で宇宙進出計画が進められ、また、水素爆弾が世界の脅威となっていた冷戦当時である。『美しい星』は「宇宙人は、我々地球人をどのように見ているのか」という三島自らが立てた問いの答えであるかのようなのだ。

ここで留意したいのは、作品を読み進める中で、我々読者ら「地球人」は鳥瞰的に「見られる側」だと感じているが、重一郎を代表とする宇宙人が地球人を見る（認識する）

方式は予想と異なるものだ。前回、金星人を自認する長女の暁子が、癌に侵された父重一郎に、「宇宙人に必須の能力」として、「どんな怖しい真実をも餌」にしながら「創り出した夢を見る能力」を求めた場面を思い出したい。これは、現実の事象に「想像力」でもって対峙することで、現実を超越する力であり、暁子にとっては、現実には追いつめられた妊娠した自分や、癌に侵された父にこそ発揮されるべき能力であった。この形而上的、哲学的に世界の事象や概念を捉え、現実を越えようとする心的な活動が「宇宙人に必須の能力」だというのである。

実際、作品後半部に展開する火星人の重一郎と敵対勢力の宇宙人である羽黒による論争の内実は、現実的な危機を有す人間知の極致としての「水素爆弾」を、「創り出した夢を見る能力」によって再構築する試みだったといえるだろう。重一郎たちにとって、水素爆弾をめぐる戦いは、米ソが握る核のボタンという物理的な意味と、世界を破滅させる被造物を生み出す人間とは何かという哲学的な意味の両方が込められている。そして、哲学が対話を通して深淵に踏み込んでいくように、対立派閥ながら同じく宇宙人を自認する羽黒こそが、この哲学的考察を深めるための対話相手といえるだろう。

この宇宙人がもつ特殊な視点を考慮せずに、重一郎の状

況を「劣等感・空虚さの強い人物であり、水爆実験などの世界危機を背景にして、すべてを自分にひきつける性癖から、現実不適応を起こしていた」⁽¹⁾（有元伸子）と、個人的な精神病理として「診断」してしまうと、羽黒との対立構

図や哲学的論争を通した作者の思考実験が読み取れなくなるだろう。また、山崎義光がテキストから読み取る「登場人物によりそって叙述されるのだが同時にアイロニックに相対化されるという」二重のナラティブ⁽²⁾も、地球人と宇宙人の「視点」双方の語りを互いに反照させる解釈方法として興味深いが、宇宙人の視点に「創出した夢を見る能力」を含めない点で、おそらくそれは表層的読みとなり、この作品の深層に仕込まれているだろう面白さに届かない。作者は「重一郎」と「羽黒」という両極の立場にある宇宙人それぞれが「創出した夢」を戦わせることで、水爆と人間という二つの実存に、哲学的に切り結ぼうとしているからだ。

二、宇宙人たちの代理戦争

「とんだものが来た！ 怖ろしいものが来た！ 私はいつか、かういふものが来はしないかと怖れてゐたのだ」

重一郎は、大杉家の前に現れた三人の男を窓から一瞥しただけで、顔色を変え、叫んだ⁽³⁾。金沢で長女暁子の懐妊の真相を知り疲弊しながら帰宅して以降、東の間の団らんに息をついていた頃のことである。

重一郎が激しく到来を恐れたこの三人組は、「白鳥座六十一番星の未知の惑星」から来たと自認する「宇宙人」だ。万年助教教授でリーダーの「羽黒」と、元教え子で銀行員の「栗田」、床屋の「曾根」で構成されている彼らは、泉ヶ岳に出現した円盤を共に目撃し「邪悪な感動」を覚えた共通体験を有している。そのため、別々に円盤体験をした大杉家の人々のような共同体的な揺らぎがない。「未知の故郷を同じくする者の連帯感を味はつた」彼らは、「薔薇園会議」なる会合を重ねていくうちに、自分たちは「人間を滅ぼすため」に地球へ来たのだと共通意思を抱くようになった⁽⁴⁾のである。

地球人を滅ぼす目的のために政治家の黒木とつながる羽黒たちにとって、地球人を護り導こうと平和団体「宇宙友朋会」の活動を広げていく異星人の重一郎は、極めて邪魔な存在だ。長男の一雄を唆し^{そそのか}重一郎の正体を掴んだ羽黒一派は、その排除のため、ついに本丸である大杉家に乗り込んできたのであった。

羽黒一派を居間に迎え入れると、重一郎とリーダーの羽